岡豐風土

〈高知県立歴史民俗資料館だより〉 第11号 1994年4月1日

県民性ということ

高知学芸高校教諭 上田 博信

かって、私は、県民性という範疇をあまり認めないことにしていた。

現在の、「県」という単位は、だいたい、かっての「日本」のなかの「国」ないしはそれより大きい範囲にわたっていて、また、江戸時代の藩という半独立の国家は、二百数十もあった。県は、ひとつの行政単位であり、可能性としては国家をもなしうる地域社会であると言えるだろう。北海道あるいは四国となればなおさらである。したがって、そこには、さまざまの、いうなればあらゆる性格の人々が包含されているはずだ。そうでなければ、高知県を舞台にした小説も成り立たないはずだろう。

自分が京都ですごした大学時代に接した友人、先輩、先生、下宿の人たち、ゆきずりの人々等々には、京・大阪をはじめ、それ以外の、九州から北海道にわたる各地の出身者があって、ちょっと言葉を聞くだけで、どこの人か、かなり見当はついた。しかし、それはそれだけのことで、いっしょに活動したり学んだり、その人に教えを受けたり、その家に下宿させてもらったり等々するに当たっての「人を見る」材料としては、なんの関わりももたなかった。

だから、県民性などと言ってあれこれのレッテルを貼るのは、たいてい無益なことで、時に有害でさえある、云々。

ざっと、こういうふうなのが、私の言い分であった。

しかし、いつのころからか、この言い分には、修正が必要であると思うようになった。

ひとつは、県民性という範疇は、ひとつの傾向として説明に使われる（結果論も多いが）ことが多く、これから何かするために、個々のA君・Bさんの適不適の判断の材料などにはほとんど使われてはいないので、私の批判は、的はずれのところ、よく言って杞憂の部分があったということ。もうひとつは、県民性ということを、「県民の性格の特徴」とし、そしてその性格とは心理学などでいう「性格」にほぼ限定していたが、もっと広く、そこの風土（単なる自然ではなく人間と関わってはじめて成りたつ概念としての）に養われ、また風土を形成してきた一要素でもある県民の性格・行動・「文化」のある傾向と解した方が、より生産的だろうということ。

先日、忘年会の席で、県民性みたいなことが話題になった。

〝高知県人は、かくも敬愛し、もてはやしている坂本龍馬を話題にする時、おたがい同士でも、県外人にむかっても呼び捨てにするのがふつうである。二年ほど前、萩へ行った時の記憶では、私があちこち連れて行ってもらったタクシーの運転手は、「吉田松陰先生」「高杉晋作先生」と、ごく自然に呼んでいた。萩ないし山口県の人たちが一般にどう呼んでいるかは、じゅうぶん確認しなかったが。〟

というようなことを私はしゃべった。そして、鹿児島ではどうだろうということになって、「西郷隆盛先生」と呼ぶのが一般だと、大学で日本史を講じている九州出身のAさんは言った。「鹿児島では西郷隆盛の悪口なんか言うと、〝袋だたき〟だという話ですが、そんなもんですか。」と聞くと、「そうですね。こういう場所でも、うかつには言えないでしょうね。」とAさんは答えた。「NHKの大河ドラマが『龍馬が行く』をやっていたころ、高知のあるバーでそれが話題になった時、バーテンが平気で『坂本龍馬はヘラコイ』と言ってましたね。もっとも、あの時はそれほどけなす調子ではなかったような気もしますが、かりにもっとけなしたとしても、必ずしも険悪な空気にはならんでしょうね。」と私は言った。

ところでAさんの言う「こういう場所」とは、高知の町中のとある大衆酒場のことで、私たちは、満員のお客さんの中で、やっと確保できた長方形の一テーブルを十人近くがぎゅうぎゅう詰めでとりかこんで、ささやかな忘年会をやっていたのである。

余談だが、そこは、ワイワイガヤガヤ喧噪の渦で、向い合っている相手の話さ

えなかなか聞きとれないくらいなので、じっさいには、他人に聞きとがめられる心配はなかったかもしれない。しかし、やはり、こっちの声も大きくなるので、ことは変わらなかったのかも。そういえば、〝高知の酒場では、ついたて一つへだてた隣の席で、犬が利口か猫が利口かをじっくりと議論しながら酒を飲んでいた。土佐人は、理屈を肴に酒を飲む〟というような話をある作家の言として聞いたことがある。出所としてさだかではないが、おもしろい話ではある。込み合っているところでは、理屈を言い合っている相手に自分の言うことをちゃんと聞きとってもらおうとして、別のグループからの声を、いやそればかりか時には、めざす相手以外は自分のグループの人のそれさえ圧倒する声をだそうとする。そうやって、それぞれが競いあって、やがて、声を張りあげるようにしても聞きとりにくくなって、川向こうと話をするよりも難しくなるときがある。

この延長上に、結婚披露宴をふくめての土佐の宴会の特色がある。じりじりしながら待った乾杯が終わるや否や、スピーチも歌も出しものも、自分ととくべつの関係にあるものか、とくに興味のあるもの以外は、聞かばこそ、見ればこそ、てんでばらばらに、会話がはじまり、だんだん声高になり、会場が皿鉢を並べた座敷であっても、立って遠くはなれた誰かのところへ移動する人が間もなく現れ、それぞれ、気に入っている人、このとき文句を言っておこうと思うヤツ、商談の相手等々をえらんで、あちこち移動する人が一人また一人と増えてくる。一方では、〝おれは動きまわるがは嫌いじゃ〟と、誰かが杯をもって差しにくるのを待ちかまえている人がいる。そして激しい献酬と酒の無理強い。会場全体がワーンとなって、全体に向けられた一人のスピーチなど聞きたくても聞こえない時さえある。県外の、多くのところ、少なくとも都会の宴会では、立食パーティーにしか、いや立食パーティーにおいてさえも、なかなか見られない光景であろう（ただし、十分調査したわけではなく、県外に在住したことのある高知県人が〝そういうのは高知だけじゃない〟と言うのを、私自身聞いたこともあるが）。

話を元にもどそう。さきの「忘年会」で、私が「高知の県民性と言えるものが何かありますか。」とたずねたところ、関東地方の出身だが、そこらの土佐人より土佐人らしいと誰かが評したこともある、日本史専攻のもう一人の大学の先生Bさんから、「そりゃありますよ。たとえば、オレが、オレが、と言いたがるところなんか。」という答えが返ってきた。

その「オレが、オレが」というところと、議論好き・それが行動とまったく切りはなされて理屈好きというところとは、つながっているだろう。そして、それらは、いかに敬愛していても、歴史上の人物である坂本龍馬を先生と呼ぶのが照れくさいという感覚、また自分が敬愛する龍馬をけなされて頭にきた人は、けなしたやつに腕づくのケンカを売るのでなく憤然と議論をふっかけて反論するだろうところと、どこかでつながっているかと思われる。そして、それらはまた、ひょっとしたら自由民権運動とも、多少の因果関係を持つかもしれない。ただし、だとしても、どちらが因でどちらが果であるか、また相互作用しているのか、などは簡単には断定できまい。

ちょっと待ってよ。あれは私が旧制城東中学校の一年生のときだったから、一九四四年四月から翌年三月までのある日、第二次大戦末期の、皇国史観が猛威をたくましゅうする中で作られた『土佐正気の歌』を全校朝礼で歌うに当ってだったと思うが、歴史の先生がその歌詞を説明する中で、まえおきの役割をはたす第一連につづく各連について、「何番は間崎滄浪先生を歌ったもの、何番は武市瑞山先生、何番は坂本龍馬先生、何番は……」というふうに、各連について先生づけで名をあげていったことを思いだす（順序は忘れたが）。講義・講演・演説みたいなときには、あのころは、「坂本龍馬先生」と、先生づけを聞くことの方が多かったかもしれない。しかし、やっぱり会話の中ではほとんど呼び捨てで、講演などでも、けっこう呼び捨てにすることもあったように記憶する。そのころの山口県や鹿児島県がどうであったかはたしかめていないが、私の記憶では、土佐人が郷党の大先達・偉人を呼び捨てにするのを他のどこかの県と比較して、批判するといった言説を聞いたような気もする。ただし、この言説の記憶は、まことにおぼろげで、ひょっとしたら私の思い入れがでっちあげたものかもしれない。

そんなこんなで、「県民性」なる範疇も、歴史・風土の中におくことにより、必ずしも捨てたものじゃないと、このごろは思いなおしている。

ただ、因果関係を簡単に断定するのは禁物である。一つの結果について原因が一つしかないとか、一つの事象から生ずる結果が一つしかないということは、めったに考えられないし、しばしば、因と果を逆にする過ちをおかしたり、じつは相互作用であったり、関係が重層的であったりするから。高知の県民性について、四国山脈と黒潮洗う長い海岸線とにはさまれた山勝ちの地形や、照りつける真夏の太陽やどしゃぶりの雨や冬の温暖や年々訪れる台風などに特徴づけられる気候等々――すなわち単純な意味での自然から説明する時は、後者を一方的に原因とし、前者を一方的に結果とすることにならざるを得ないだろう（説得力を持った説明があるのを不勉強の私が知らないだけかもしれないので、その時は謝ります）。

単なる自然ではなく、人間の生活・社会との関係におかれた自然環境としての「風土」は、すでに歴史と切りはなせないだろう。

〈出版案内〉

3月刊行　「研究紀要」第3号

新発見の銅剣特集号。岡本健児氏と当館の岡本桂典による「高知県香美郡野市町兎田八幡宮と絵画をもつ銅剣」を掲載。

「ものがたり考古学―土佐国辺路五十年―」

高知新聞に岡本健児氏が連載した「高知・ひとの歴史―小・中学生の考古学―」全百回をもとに、考古学の立場から高知県の歴史をわかりやすく紹介。子どもから大人まで楽しめる高知県の考古学入門。

（A5版　334頁　定価　二八〇〇円）

—特別展「坂本龍馬」によせて—

資料が語る「龍馬の軌跡」

下村　公彦

長門の国大火の図（瓦版）　下関市立長府博物館蔵

当館では、平成六年四月二十九日から特別展「坂本龍馬」を開催する。本展では、特に京都国立博物館と下関市立長府博物館の御協力を頂き、加えて県下の資料所蔵者各位の御厚意により、計百余点の資料を展示して龍馬の生涯が辿れるようになった。以下、展示予定資料の一部を紹介しながら、「龍馬の軌跡」に若干ふれてみたい。

(1)日本海路記　　久礼田小学校蔵

龍馬は、天保六年（一八三五）郷士坂本八平の次男として生まれた。本資料は、同家の本家才谷屋に伝えられていた地図で、四国周辺から陸奥までの沿岸図である。才谷屋が各地へ交易に出る際に利用したものと考えられ、本家のこういった側面も龍馬の進路に影響を与えたと思われる。

(2)龍馬の借用証文　　田中正郎氏蔵

文久元年（一八六一）秋、龍馬は土佐勤王党に加盟した。本状は、同年十月の丸亀遊歴にあたり、城下北方柴巻の田中良助から金二両を借用したことを示す証文である。同地には坂本家の領知があった。

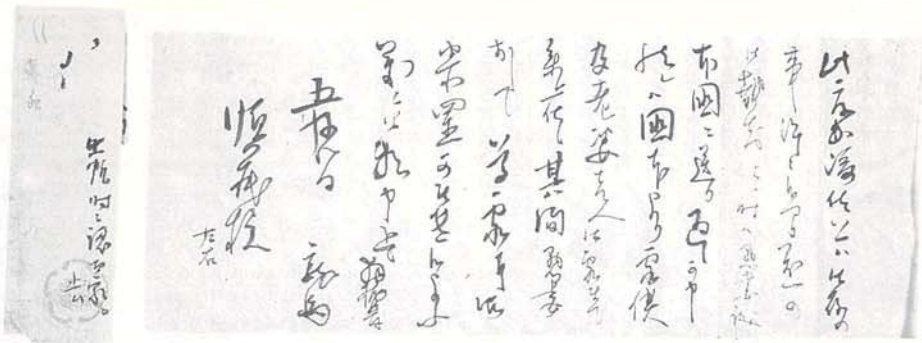
翌二年三月、龍馬は宮野々関を抜け脱藩、十月頃勝海舟に会い、その場で門人となる。この出会は龍馬の人生を決定した。

(3)乙女宛龍馬書状（文久三年六月二十九日）　　京都国立博物館蔵

勝の右腕として活躍する龍馬が、姉乙女に自分の真情を吐露した有名な書状。

前段では、長州の攘夷決行に対する幕府の対応について、「あきれはてたる事ハ其長州でたゝかいたる船を江戸でしふくいたし又長州でたゝかい申候、是皆姦吏の夷人と内通いたし候もの」と憤り、「右申所の姦吏を一事に軍いたし打殺、日本を今一度せんたくいたし申候事ニいたすへく」と述べている。

後段では、「土佐のいもほりともなんともいわれぬいそふろふに生て一人の力で天下うごかすべきハ是又天よりする事なり、かふ申てもけして〳〵つけあがりハせず、ますますすみかふてどろの中のすゞめがいのよふに常につちをはなのさきゑつけ、すなをあたまへかぶりおり申候」と告げ、また追伸では、青蓮院宮令旨事件で切腹を命ぜられた平井収二郎にふれ、「平井の収



三吉慎蔵宛坂本龍馬書状（慶応３年５月８日付）

二郎ハ誠にむごい〳〵いもふとおかを（加尼）がなげきいか計か」と気遣っている。

(4)龍馬等寄せ書き袱紗（ふくさ）・収二郎爪書きの辞世　平井志治氏蔵「平井・西山家資料」

平井収二郎の妹加尾（後に西山志澄妻）の秘蔵品として子孫の家に伝わるもの。

他に収二郎の書状や短刀も併せて昨秋当館に寄託された。これらも当館三階企画コーナーにおいて展示の予定。

(5)権平・乙女・おやべ宛龍馬書状　当館蔵

慶応元年（一八六五）九月七日付。薩長和解に向けて龍馬が東奔西走している頃、兄の権平他に出した書状。当時の長州をめぐる政治状況を詳述、龍馬は特に桂小五郎（木戸孝允）を評価しており、幕府軍の再征に備えて「此頃長ハ（長州）兵を練ル事甚盛」と伝えている。

翌二年一月薩長同盟が成立。この同盟は明治維新の構図を決定した。同年三月には龍馬は妻お龍を伴い、鹿児島への「新婚旅行」を楽しんでいる。

(6)三吉慎蔵宛龍馬書状　功山寺蔵

慶応三年五月八日付。いろは丸事件解決のため決死の覚悟で長崎に向かう龍馬が、下関出帆時に三吉あてに後事を託した書状。三吉は長府藩士で、前年の寺田屋遭難の折には龍馬と共に戦い窮地を脱している。

(7)土佐藩船夕顔絵馬　仁井田神社蔵

慶応三年六月、長崎から京に向かう藩船夕顔の中で、龍馬は後藤象二郎に新しい国家体制について語った。これを海援隊文司長岡謙吉が成文化したのが「船中八策」である。後藤は、この政権奉還策にとびつき、山内容堂の同意を得て大政奉還建白を行なった。

(8)新政府綱領八策　下関市立長府博物館蔵

大政奉還がなった後、近く樹立されるべき新政府の大綱を龍馬が記したもの。文末に次のように付されている。

右預メ二三ノ明眼士ト議定シ、諸侯会盟ノ日ヲ待ッテ云々、〇〇〇自ラ盟主ト為リ此ヲ以テ朝廷ニ奉リ、始テ天下万民ニ公布云々、強抗非礼公議ニ違フ者ハ断然征討ス、権門貴族モ貸借スル事ナシ

慶応丁卯十一月　坂本直柔

〇〇〇は慶喜公を伏せたものとする説がある。しかし、西郷隆盛らの武力討幕派は、徳川慶喜を「断然征討」すべく挙兵の準備をしていた。

(9)血染の屏風（びょうぶ）　京都国立博物館蔵

慶応三年十一月十五日、京都河原町近江屋（おうみや）で、龍馬は中岡慎太郎と談じていたところを襲撃され斃（たお）れた。三十三歳。本資料は、その現場にあったもので、下方に多数の血痕が認められる。

十二月王政復古が発令され、翌年一月戊辰の内乱が開始された。薩長を中心とする討幕派は、天皇の「親征」を建前に「官軍」となり、旧幕府勢力を圧倒していった。

特別企画 坂本龍馬 里帰り展

平成６年４月29日～６月５日

●講演会　５月14日（土）「脱藩と脱幕府」松浦玲氏
５月21日（土）「龍馬暗殺」　木村幸比古氏

共催／高知新聞社・ＮＨＫ高知放送局
高知県立坂本龍馬記念館

ひと 1

吉村淑甫（よしむらよしほ）館長

歴民に関わってくれているひと、地域で歴史研究にがんばっているひと、高知県に関心をもっているひと、そんなたくさんのひととの出会いとつながりを求めて「ひと」というインタビューのコーナーを作ってみました。

第一回目は、当館の吉村館長に登場願って、ふだんの仕事場では聞けない本音の意見や、歴民や高知の歴史研究への要望、熱い想いを伺いました。今回紹介できなかった土佐の文化的特徴やいざなぎ流の話はまた機会を改めて…。

（中村、梅野）

――開館してからの3年間をふりかえっていかがでしたか？

僕は、こうでなければならないといったような運営はしたくない。この3年間は面白かった。ただし、面白くやるということには犠牲が伴う。そのことを館自体が考えていかなければならない。

館長をひきうける際には、すべて出来上がっているので座っていればいいといわれましたが、僕の面白がりのせいもあって、座っているだけということは出来ず、いろいろ口を出してきました。面白がってやった成果はあったと思う。

僕はすべてを受け入れるという形でこれまでやってきて、これからもそのつもりだから、館員にも固くなられては困るね。

――企画展についてはどのように考えていますか？

企画展をやらなくては人はこないよ。企画展は年4回はやらなくてはならない。

派手にやりたいところだけど、学芸員も少ないし室のスペースが小さすぎる、今の状態では内容を深めていくということになるでしょうね。

また、企画展のことだけに限らないけれど、これからも言いたいことはどんどん言うようにして、当館を拡張していきたいと思っています。

――当館の今後についての展望をどうぞ

歴史民俗資料館ということで、歴史・民俗・考古の学芸員がいるわけだけれど、そこにもうひとつ、文化史のような性質を館にも学芸員にも持たせていきたいと思います。学芸員の中に、近世の専門がいないのが残念です。これは致命的です。そういった学芸員を増やしたいと思っているのですがね。

民俗については内省の学としての掘り下げはまだまだいりますが、現在の時点ではやはり文化人類学の業績を逸することはできないでしょう。ただし、アジア地域に限られるでしょうけれどね。柳田国男の一国民俗学の形が、他のアジア民俗においても必要ではないでしょうか。日本以外では韓国が進んでいるでしょう。比較はその後からになりましょうね。

歴史は近世をもっと深めないと。中世は史料が限られています。しかし近世はまだまだ発掘の余地がある。先づ詳細な年表が欲しい。どんどん史料を発掘して充実した年表を作りたい。明治維新関係についてはできつつあるけれど、維新が出てくる以前の状態については研究が浅い。維新が出てくるために、その前段階としての文化形態があったと思われます。儒教や国学が厳然としてあったわけですけれども、そういう思想史の研究が少ない。又、それに伝統文化をふまえた生活技術ですね。僕が民俗をやっていたときに一番熱を入れてやっていたのは芸能史でしたが、これは伝統と歴史のかかわり方になりますね。そういう意味でも、当

坂本龍馬展のポスター
吉村館長はこれまでの館の企画ポスターの多くをデザインしている。これは最新作。空飛ぶ龍馬の紋服が斬新である。

館のやることはたくさんあると思います。学芸員にも「ここにこんなものがあります。」ともっともっと伝えてもらいたいね。

――館の性質として持たせたいという文化史についてもう少し聞かせて下さい。

土佐の文化史の基本資料となるもののひとつとして寺石正路氏の『南学史』があります。その意味を読み取っている歴史家が案外少ないように思います。今一つ、武市佐市郎翁の諸業績も加えましょう。

土佐の場合、かつての高知大学は経済史を中心にしていたため文化史系の歴史家が不足した。もっと文化史をやる歴史家を育てていかなければならないのではないか。

寺石氏の影響下に土佐史談の古い時代の会員や郷土史家がいました。その後、経済思想のもとにみていくという形が出てきまして、社会経済史中心になり、文化史を考える余裕がなかった。このあたりで文化史に取り組まなければ土佐の歴史学はもう一つ上の段階へと発展しないのではないかと思います。生活も芸術もすべて含めた文化史という観点から考えていくと、これまでとは違った筋道がみえてくると思います。

僕に館長をやって欲しいという話がきたときにも、歴史や民俗、経済についても、文化史の中でもう一度考えてみようという考え方をもっていたので引き受けたのです。当館の今後の研究のひとつの柱に文化史を据えたい。当館の常設展自体が政治、経済史の通史展示となっていますが、今後はそうした研究成果を踏まえて文化史を常設展にも取り入れていきたいと考えています。

➡平成4年4月「仮面の神々」ポスター
田辺寿男氏撮影の物部村久保のババ面をコピー処理し、ひきのばした。題字も館長の筆による。コピーの粗さが、土俗面の雰囲気にマッチした。

⬆平成4年10月「鯨の郷・土佐」のポスター
室戸市佐喜浜の俄団尻幕から海のイメージをとり、窪津浦鯨文書から「山見の合図の標」をくみあわせた。鯨自体は姿を見せない大胆なデザイン。

⬇平成4年12月刊行「土佐・歴史の遺品1」。文庫版ながらオールカラーで館長のこだわりが感じられる。内容は学芸職員の新聞連載をもとに、一級の研究者の文章を集めた読みもの。

――どのような形で来館者に当館を利用してもらえばいいと考えますか？

当初、県は当館を観光施設ととらえていましたが、僕は博物館だとはっきりさせました。観光的にこれは面白いというものをみせるのではない。あくまでもその地方々々の生活が基本ですから、観光的な対処の仕方は不遜です。したがって博物館としての基本姿勢というものがあり、展示も調査研究に基づくものでなければならないと思います。

博物館の調査研究の要は学芸員です。寄贈の申し出には、いるものもいらないものも全ていただくようにしたい。いらないものの中にやがて重要なものが出てくるものです。いる、いらないは、今の判断でしかないのだからね。その一方で学芸員には、現段階での資料の価値を判断する目が必要です。資料を能動的に収集していくのも学芸員ですから。そこにも学芸員が必要なわけがあるのですが、僕は博物館としては当館は学芸員が少ないと思っている。第一、先にも述べたように近世の学芸員も、文化史系の人もいないのですからね。

とにかく博物館としての基本姿勢・開発と保存をはっきりさしていきたいと思っています。

本棚

「野市町史・上巻」（中世編）

山本大著（野市町）

土佐歴史学界の重鎮山本大氏らの執筆による極めて秀逸な町史が刊行された。兎田八幡宮の絵画銅剣で沸いた野市町の町史である。今回は上下巻全編の内、中世の記述について紹介してみたい。土佐の中世は、文献資料が希薄なため、どの市町村史の記述をみても、その分量・内容ともに十分とはいえないものが多い。山本氏は、「野市町の中世史は香宗我部氏の歴史である」と述べているが、現存する希有の中世資料である『香宗我部家伝証文』（東京国立博物館蔵）をフルに活用できる利点を活かし、他の追随を許さない程の充実した内容に仕上げられている。また、同文書の写真が二八通も掲載され、丁寧な解説がなされている点は良心的である。他に、『吾妻鏡』『佐伯文書』『吸江寺文書』『影写本・西山文書』『浜文書』などを丹念に引用し、一地域史でありながら、あたかも県史を読んでいるが如き錯覚を起こす。とかく物語や伝承に頼りがちな同時代の記述が多い中、真筆文書による徹底した史実の追求は、後学の指標となろう。特に、『香宗我部家伝証文』と『浜文書』は、執筆者の山本・吉田萬作両氏の尽力により光があてられたものであり、その功績は計り知れないものがある。なお、字数の都合で触れられなかった他の分野についても、地元の資料を丹念に集めた労作となっており、歴史好きならずとも必携の一冊である。定価上下巻セットで五〇〇〇円。（野本　亮）

歴民スポット①
体験学習室

〈新しく始まったこのコーナーでは、歴民の表や裏の施設や展示を紹介します。〉

1階にある体験学習室は、子ども教室などのときには、「体験」学習を行なう場所として利用されていますが、ふだんは歴史や高知県の本を自由に閲覧できる「学習」スペースとして親しまれています。はじめは少なかった本もいまでは五百冊。子どもに人気があるのは何といっても「学校の怪談」や「おーい！龍馬」です。展示を見たあとは体験学習室で知識を増やそう！

（梅野）

歴史散歩

国分寺

第十一回

比江地域の西方に国分寺の森が見える。現在、四国霊場第二九番札所となっている。寺域は国の史跡に指定されている。

奈良時代、聖武天皇によって「国分寺建立の詔」がだされ、全国に国分僧寺・国分尼寺が建立された。ここ土佐国分僧寺跡もその一つとして造営された寺であるが、正確な創建時期は明らかではない。しかし、寺に伝世されてきた梵鐘が平安時代前期のものであり、梵鐘は寺院建立の最終段階で納められることから平安時代前期には完成していたと考えられている。

仁王門をくぐって正面に見える建物は本堂（金堂）である。金堂は『南路志』闔国之部所収の国分寺棟札写に「国分寺金堂大旦那秦覚世元親奉行吉川彦兵衛御苻四郎左衛門永（不明）元年戊午九月廿三日」とある。覚世とは国親の法名であり、工事を担当したのは奉行吉川彦兵衛と御苻四郎左衛門である。このことから、永禄元年（一五五八）に長宗我部国親・元親親子が再建したことがわかる。江戸時代になって、寛永十年（一六三三）に二代藩主山内忠義が屋根を葺きかえ、向拝をつけた。この後も大修築を承応二年（一六五三）十一月二八日に竣工している。金堂は重要文化財に指定されている。寄棟造りで木材を薄くして葺いた柿葺きである。

現在の書院の内庭園内には塔心礎が立てかけられている。柱座径は六八センチメートルあり、他の国分寺のそれと比べると小さく、（ちなみに比江廃寺のものは八一センチメートルである）あまり高い塔ではなかったようである。

現在の寺域を囲むように東側と北側、南側の一部に土塁が残されている。創建当初からの土塁であると考えられてきたが、最近の発掘調査の結果から寺が現在よりも北に広がっていたと考えられている。また、現在の金堂の位置に創建当初の金堂があったらしいことなど次第に明らかになってきている。

〈土佐電鉄バス領石・植田行き国分寺通下車徒歩一〇分〉

曽我満子

国分寺本堂

4～7月の催し物

〔企画展〕

4.29～6.5	坂本龍馬	京都国立博物館・下関市立長府博物館の里帰り資料を含む計100点の資料で龍馬の足跡を探る。
7.30～9.4	翁・尉・男・女・霊・鬼 －土佐・能面の展開－	山内神社宝物資料館収蔵の能面を中心に、土佐神社などの能面を加えて能面の形成史をたどる。

〔講演会〕

5.14(土)	松浦玲氏	脱藩と脱幕府－坂本龍馬と勝海舟を対比して－
5.21(土)	木村幸比古氏	龍馬暗殺

〔史跡めぐり〕

5.28(土)	上黒岩岩陰遺跡と山岳寺院	愛媛県久万町上黒岩遺跡・大宝寺・岩屋寺など見学

〔子ども歴史教室〕

6.11(土)	れきみん探検	ＡＭ10時集合。ふだんは見られない歴民の裏側を探検！
7. 9(土)	服のうつりかわり	ＡＭ10時集合。総合展示室を見ながら服の歴史を学ぶ。

〔企画コーナー〕（３Ｆ）

4.29～	平井・西山家資料	幕末の志士・平井収二郎の資料を展示

〔歴民館日録〕

月日	出来事
平成五年	
一二月一〇日	総合展示室企画コーナー「堺事件」開始
一二月一一日	子ども歴史教室「火の昔むかし」
一二月二七～三〇日	収蔵庫燻蒸
平成六年	
一月二二日	企画展「土佐の古墳を掘る」開幕
一月一九日	企画展講演会
二月一二日	子ども歴史教室「土佐の古墳を掘る」展を見る
二月一九日	企画展講演会
二月二六日	第三回史跡巡り「香南の史跡巡り」
三月五日	企画展特別講演会
三月九日	民俗展示室企画コーナー「船大工の道具箱」終了
三月一二日	子ども歴史教室「伝統産業を見る」
三月二七日	企画展閉幕

〈ひとこと〉

今号から少し紙面を改め、「ひと」と「歴民スポット」のふたつの連載をスタートしました。歴史民俗資料館も開館から丸三年が過ぎ、スタッフも忙しいながら仕事に慣れてきたようです。企画展や子ども歴史教室を充実させる一方で、常設展示をもっと楽しめるような学習ノートの作成を進めています。今年から学芸課による講座も始めます。史跡巡りに参加した人からも、テーマや時代をしぼった史跡見学を、という声もあがっています。一度には無理ですが、少しづつ歴民館は成長していきます。その成長を助けるのは何よりも歴民に集ってくる一人一人の個人だと確信しています。土佐に生きた人たちはどのような人たちだったのか？彼らの生きざまはどうだったのか？私たちが選択しようとしている未来の歴史は正しいのか？そのようなことをふと考えてみるような場所として、また謎に満ちた歴史世界への知的好奇心の根城として歴民の活動は、まだ始まったばかりなのだと思います。（梅野）

まだ始まったばかりの時点で「龍馬展」とは無謀な！と思いましたが、幸い京都国立博物館や長府博物館の御協力を頂き、何とか「龍馬の軌跡」が追えそうです。（下村）

野市町兎田八幡宮の銅剣を見るために多くの県外の方々が来館されました。（岡本）

〈おことわり〉

連載中の「城下町家扣」は、資料価値大のため、来年度の紀要に一括掲載することが決まりました。そのため連載の方は中止いたします。

平成六年四月一日
編集・発行　高知県立歴史民俗資料館
〒783南国市岡豊町八幡1099－1
TEL　0888(62)2211
FAX　0888(62)2110
開館時間　午前9時～午後5時
（入館は午後4時30分まで）
休館日　毎週月曜日（祝日及び振替休日にあたる場合は火曜日）12月28日～1月4日
入館料　一般・400円／中高校生・150円／小学生・50円
団体（20人以上）割引きあり
（療育手帳・身体障害者（1・2級）手帳所持者とその介護者、高知県長寿手帳所持者は無料。毎月第2土曜日とその翌日の日曜日、こどもの日、文化の日、勤労感謝の日は小中高生は無料）
印刷・川北印刷株式会社